

(財)大阪府文化財センター 小テーマ展示

シリーズ ここまでわかった考古学

うずまさ 太秦古墳群 発掘調査成果

しょきぐんしうふん
～大阪の初期群集墳を考える～

2006年3月12日(日)～3月26日(日) 大阪府立近つ飛鳥博物館 特別展示室

はじめに

古墳時代後期（6世紀頃）、各地に爆発的に築造される「群集墳（後期群集墳）」に先行する時期（5～6世紀前葉）の群小古墳は、「初期群集墳」や「古式群集墳」と呼ばれ、古墳時代中期から後期への社会変化や集団関係を具体的に示す資料として位置づけられています。しかし奈良県石光山古墳群や新澤せんづか千塚古墳群のような調査例と比べ、大阪府下ではこれまで良好な調査事例が知られていませんでした。

近年、大規模な発掘調査が各地で実施され、これまで様相がよくわからなかった大阪の「初期群集墳」を考えるための材料も増加してきました。第二京阪道路建設に伴い発掘調査が実施された寝屋川市太秦古墳群もそのひとつです。太秦古墳群尾支群では、尾根上に25基の古墳を確認しました。中小の方墳が群集し、埋葬主体は木棺直葬と推測されます。またその形成時期は5世紀中葉～6世紀前葉とまさに初期群集墳の要件をそなえたものでした。太秦古墳群尾支群が立地する丘陵の周辺地域の調査では、古墳群の中心的な古墳と考えられる太秦高塚古墳や、渡来人との関係を想定させる、同時期の馬飼い集落の様相なども明らかになりつつあります。河内湖を望む地域における古墳時代中期から後期の社会の具体相を考える資料が増加しており、そのような様相の中に「初期群集墳」を位置づけることが可能になりつつあります。

今回の展示では太秦古墳群の調査成果を中心に、その成立背景を考えるための関連資料を展示するとともに、あわせて府下の各地域における同時期の群小古墳の調査成果を展示し、大阪における初期群集墳の成立とその背景、地域ごとの特徴、後期群集墳との関連などを考える材料を提供したいと考えます。



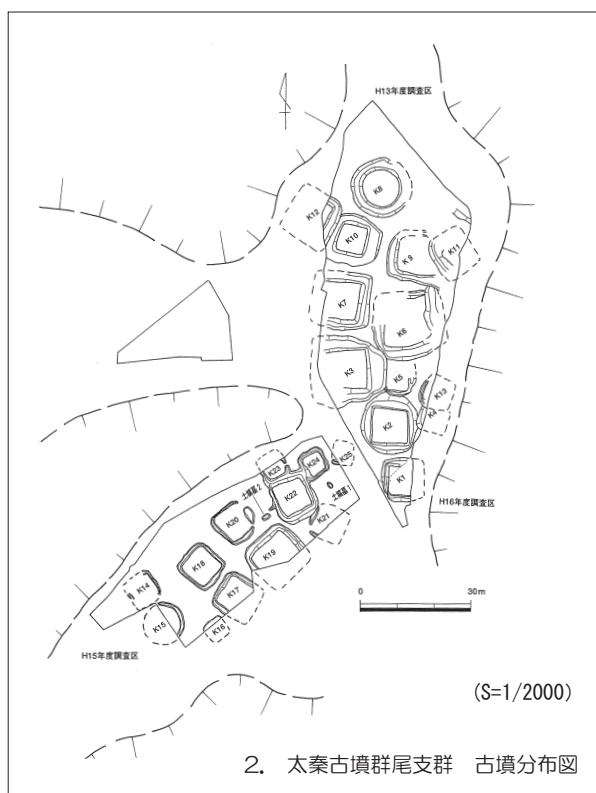
1. 太秦古墳群尾支群全景

うずまさ 太秦古墳群と太秦高塚古墳 うずまさたつか

太秦古墳群は寝屋川市東部の丘陵上に分布する古墳群です。現在では太秦高塚古墳以外にその形をとどめるものはありませんが、丘陵上の各所から埴輪や須恵器などの遺物が偶然に発見されることから、本来は多数の古墳が築造されていたと考えられています。

京都と大阪を結ぶ第二京阪道路の建設工事に先立つ確認調査では、尾根上に古墳の周溝と考えられる遺構が確認されました。地名から「尾支群」と名付けられたこの群は、平成13年度・15年度に本格調査が実施され、一辺10m程度の方墳を中心とした多数の古墳が密集して分布する様相があきらかとなりました。調査された範囲だけでも古墳の数は25基を数えますが、2、3基程度からなる小さなまとまりに分けることができそうです。3号墳において一部が確認された以外は埋葬主体を含む墳丘部分は完全に削られ、残されていませんでした。埴輪や須恵器などの遺物はおもに周溝から出土しましたが、埴輪は8号墳・17号墳だけから出土しており、特定の古墳にのみ使用されていたようです。

出土した須恵器や埴輪から、古墳群は5世紀中葉から6世紀前葉に形成されたものと考えられます。これまでのところ太秦古墳群中では横穴式石室をもつ古墳は確認されておらず、6世紀中葉以降、「後期群集墳」の時期には、太秦古墳群では古墳は築造されなくなったものと考えられます。



2. 太秦古墳群尾支群 古墳分布図



3. 太秦古墳群尾支群17号墳



4. 太秦古墳群尾支群出土遺物

太秦高塚古墳は「尾支群」の北西600mに位置する古墳で、太秦古墳群では墳丘が現存する唯一の古墳です。平成13年に史跡整備に伴う発掘調査が実施されました。調査の結果、北西部に造り出しを有する直径37mの円墳であることがわかりました。墳丘は2段に築造され、葺石は見られませんでしたが、テラスの部分には埴輪列が巡っていた様子が復元できます。方形に張り出した造出し部分でも縁辺部に円筒埴輪列が確認され、加えて人物・家・盾・鶴・水鳥などの形象埴輪が出土しました。埋葬にかかる祭祀が行われた場所であると考えられます。墳頂部分では埋葬主体が確認され、短甲・鎌・斧・馬具などの副葬品が出土しました。埴輪などの特徴から古墳が築かれた時期は5世紀後半と考えられます。

同じ太秦古墳群を構成している古墳であっても「尾支群」で確認された古墳と太秦高塚古墳を比較すると、古墳の規模、使用されている埴輪の量、副葬品の内容などいずれをとっても大きな格差があることがわかります。このような古墳の格差は被葬者の階層を反映していると考えられますが、群集墳を構成する集団のリーダーの墓が太秦高塚古墳、集団の構成員の墓が「尾支群」を構成するような群小古墳ではないかと考えられます。

太秦古墳群に葬られた集団がどこに住んでいたかを直接知ることは難しい課題ですが、第二京阪道路の建設に伴う発掘調査では古墳群の西側の段丘から低地部分において、ほぼ同じ時期に形成された集落や生産遺跡が明らかになっています。高宮遺跡ではひな壇状に造成された段丘斜面から堅穴住居が30棟近く検出され、韓式系土器や初期須恵器といった渡来人に関連する遺物が出土しています。また低地部に位置する蔀屋北遺跡や讃良郡条里遺跡では、この頃に活発化する「馬生産」関連の集落が確認されており、韓式系土器やU字形土製品といった渡来系の文物が多数出土しています。このような集落の形成や生産活動の展開が、太秦古墳群の消長と深くかかわっているものと考えられます。



5. 太秦高塚古墳



6. 復元整備された太秦高塚古墳

総持寺古墳群・福井西古墳群

総持寺古墳群は北摂山地から派生する富田台地に立地する古墳群で、府営住宅建替えに伴う発掘調査で新たに確認されました。40基をこえる古墳が調査されましたが、1基を除きすべて方墳で、一辺10m程度のものが中心となるようです。埋葬主体を含む墳丘部分が完全に削平されていましたが、周溝から埴輪や須恵器などが出土しています。出土した須恵器は初期須恵器を含み、5世紀前葉から5世紀中葉の比較的短期間に形成されたものと考えられます。

総持寺古墳群の北約1kmのところに全長226mの大型前方後円墳である太田茶臼山古墳が立地しています。総持寺古墳群に用いられた埴輪は太田茶臼山古墳に用いられたものと同じく、高槻市新池窯で生産されたと考えられています。さらに北側の丘陵には北摂地域最大の「後期群集墳」といわれる、100基以上の横穴式石室墳が築造された塙原古墳群が存在します。総持寺古墳群の形成時期とは少し期間があくようですが、二つの「群集墳」の関係も今後検討を要する課題です。

福井西古墳群は北摂山地の裾、茨木川の河岸段丘上に立地する古墳群で、昭和56・57年度に行われた府立高校建設に伴う発掘調査で確認されました。調査範囲からは12基の古墳が検出され、方墳6基、円墳5基、帆立貝式前方後円墳1基で構成されます。墳丘、埋葬主体とともに削平されていて内容はわかりませんが、残された周溝から埴輪、須恵器などの遺物が出土しています。古墳群の形成時期は5世紀後半頃と考えられます。福井西古墳群の北側に接する尾根上には横穴式石室墳30基以上で構成される新屋古墳群があり、福井西古墳群に継続する「後期群集墳」ではないかと推測されています。



7. 総持寺古墳群39号墳



8. 総持寺古墳群39号墳

植附古墳群・段上古墳群

植附古墳群は生駒山地西麓の扇状地に立地する古墳群で、平成4年に共同住宅建設に伴う調査で確認されました。6基の方墳が接するように分布すると考えられています。いずれも埋葬主体を含む墳丘は削平されていますが、周溝から土器などの遺物が出土しており、特に1号墳からは須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器、馬歯などのまとまった遺物が出土しています。古墳群の形成時期は5世紀から7世紀にわたる可能性が指摘されていますが、5世紀後半を中心とするようです。

段上古墳群は植附古墳群の南約3kmに位置する古墳群で、平成7・12年度に府道建設に伴い調査が行われました。調査範囲では4基の方墳が検出され、いずれも墳丘は削平されていましたが、4号墳では木棺の痕跡がのこる埋葬主体が確認されています。各古墳の周溝からは埴輪、須恵器、土師器、韓式系土器などの遺物が出土しており、5世紀中葉から後葉に形成されたものと考えられます。

植附古墳群東側の生駒山地東斜面には神並古墳群、段上古墳群の東側には山畠古墳群などの「後期群集墳」が分布し、横穴式石室墳が多数築かれています。このような古墳群同士の関係についてはよくわかつていいくところが多く、今後の検討課題といえるでしょう。



9. 植附古墳群1号墳



10. 段上古墳群出土埴輪

長原古墳群（長原遺跡・城山遺跡・八尾南遺跡）

長原遺跡は羽曳野丘陵から北へ張出した瓜破台地上に立地する古墳群で、これまでに200基を超える古墳が確認されています。古墳の分布からはいくつかの小さなまとまりを認めることができますが、隣接する八尾南遺跡で調査された古墳群などもそのようなグループのひとつとして捉える意見もあります。群形成の初期と末期には中型の円墳や小型の前方後円墳が認められますが、大多数は一辺10m前後の小

方墳で構成されます。墳丘や埋葬主体は後世の開墾などで壊されたものが多く、不明な部分が多くあります。墳輪を用いる古墳が多く、木棺直葬の埋葬主体を持つものが多いと考えられます。長原131号墳では墳丘上に円筒埴輪や須恵器の大甕が並べられており、周溝からは須恵器など多くの遺物が出土しています。城山遺跡で調査された長原167号墳のように韓式系土器を用いた土器棺を埋葬主体を持つものもあり、渡来系集団の影響が強く感じられる古墳もあります。八尾南遺跡で調査された八尾南8号墳や八尾南13号墳では周溝の一角に須恵器の壺類を中心とした土器を集めて設置した遺構が確認されています。古墳の周囲で行われた埋葬に関する儀礼の痕跡であると考えられます。

長原古墳群では5世紀代に多数の古墳が築かれますが、6世紀に入ると古墳の数は減少し、6世紀前半から中ごろに横穴式石室を埋葬主体に持つ130号墳（七ノ坪古墳）などを築造して群形成を終えるようです。一方、この時期以降、長原古墳群の東方、柏原市の東山丘陵上には横穴式石室墳が多数築造され、総数2000基ともいわれる河内地域最大の超大型「後期群集墳」、平尾山古墳群が形成されます。これを長原古墳群に継続する墓地とする意見もあります。



11. 長原古墳群131号墳



12. 長原古墳群131号墳出土遺物



13. 長原古墳群167号墳



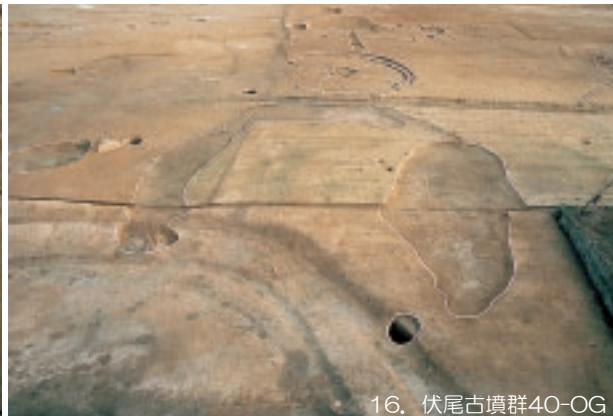
14. 八尾南遺跡8号墳

伏尾古墳群

伏尾古墳群は泉北丘陵からのびる尾根上に立地する古墳群で、阪和自動車道の建設に伴い調査が行われました。4基の方墳が確認されましたが、いずれも削平が著しく、周溝を検出するにとどまり、埋葬主体などは不明です。41-0Gは一辺16mの方墳で、周溝からは埴輪や須恵器がまとまって出土しました。伏尾古墳群は5世紀後半ころに形成されたと考えられますが、谷を挟んだ北側の尾根には同時期の集落があり、須恵器の生産に関わった、古墳群の被葬者集団のものと考えられています。また南側の尾根には5世紀前半に形成されたと考えられる円墳中心の小代古墳群、やや距離をおいた東側の丘陵上には「後期群集墳」と考えられる陶器千塚古墳群があり、それぞれ時期的には連続する可能性があります。



15. 伏尾古墳群41-OG



16. 伏尾古墳群40-OG

郡戸古墳群・河原城古墳群

郡戸古墳群・河原城古墳群は羽曳野丘陵の北に広がる段丘面上に立地する古墳群で、南阪奈道路建設に伴う発掘調査で確認されました。郡戸遺跡の調査では7基、南東に少し離れて位置する河原城遺跡の調査では、可能性のあるものを含めて3基の古墳と土器棺1基が確認されました。いずれの古墳も墳丘は大きく削られており、埋葬主体の様相などは不明ですが、周溝から須恵器を出土するものもあります。埴輪は出土しないことから古墳には用いられていなかったと考えられています。河原城遺跡では隣接地で同時期の集落が確認されており、それに伴う比較的小規模な墓地であると考えられています。郡戸古墳群は5世紀後半から6世紀前半頃、河原城古墳群は6世紀後半頃に形成されたと考えられます。



17. 郡戸古墳群1号墳

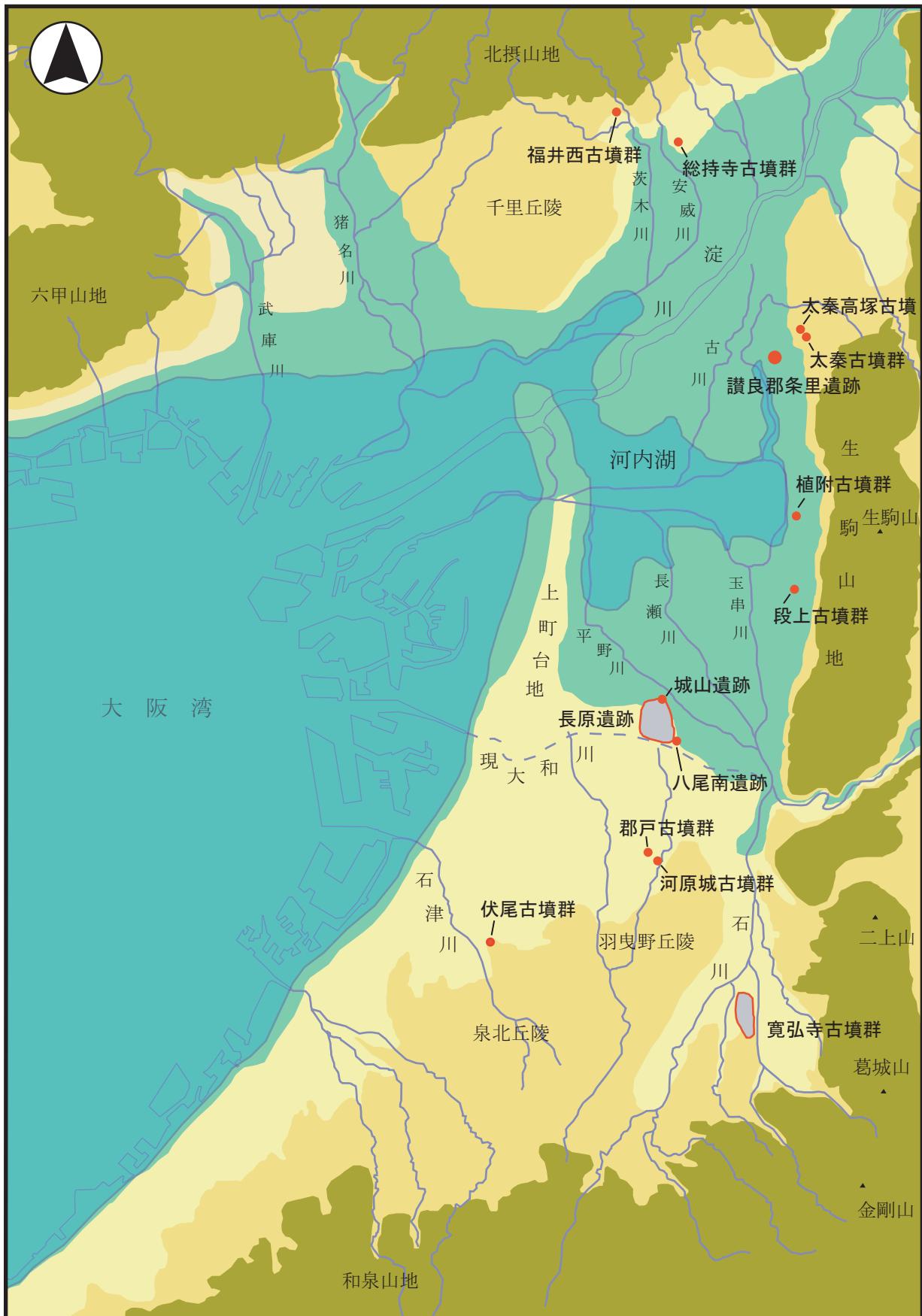


18. 河原城古墳群土器棺

寛弘寺古墳群

寛弘寺古墳群は石川とその支流、千早川にはさまれた丘陵上に立地する150基程度の古墳からなる古墳群で、昭和57年以降、農地開発事業に伴う発掘調査が行われてきました。発掘調査の成果によると、古墳群の形成は古墳時代前期にさかのぼり、鏡や玉などを副葬する古墳が知られています。古墳時代中期になると丘陵の東寄りに場所を移して方墳や造出し付の円墳が築かれるようになります。27号墳は一辺15mの方墳で、埋葬主体として粘土棺に組合式木棺をおさめていました。内部から鏡、ガラス小玉が出土しており、5世紀前半の築造と考えられます。17号墳は全長26mの造出し付円墳で、周溝からは須恵器や埴輪などが出土しています。5世紀後半の築造と考えられています。

「後期群集墳」の時代、6世紀にはいっても大きく場所を変えることなく、横穴式石室を埋葬主体とする古墳が築造されます。26号墳では横穴式石室の奥壁付近から須恵器などがまとまって出土しました。



展示古墳群・遺跡の分布

また47号墳からも石室内部から須恵器がまとまって出土しています。これは直葬系の埋葬主体から横穴式石室へ棺を収めるといった埋葬形態の変化とともに、多くの須恵器を石室内に納めるといった埋葬儀礼上の変化も生じたものと考えられます。この時期、北東約5kmに位置する一須賀古墳群では200基を超える横穴式石室墳が築かれますが、そのような大型の「後期群集墳」の形成とは別に、それまでと同じ墓地に古墳を作り続けているようです。

寛弘寺古墳群では前期古墳から7世紀の終末期古墳の時期まで連綿と古墳の築造が続けられ、それは奈良時代から平安時代の火葬墓・土壙墓の造営まで続きます。さらにその後、中世に形成されたと考えられる寛弘寺墓地は現代にまで連綿と墓地としての営みを続けています。



19. 寛弘寺古墳群



20. 寛弘寺古墳群17号墳



21. 寛弘寺古墳群47号墳



22. 寛弘寺古墳群26号墳

写真提供

写真5. 6. 寝屋川市教育委員会

写真7. 8. 19. 20. 21. 22. 大阪府教育委員会

写真9. 東大阪市立郷土博物館

写真10. 東大阪市教育委員会

写真11. 12. (財) 大阪市文化財協会

写真14. (財)八尾市文化財調査研究会



(財)大阪府文化財センター 小テーマ展示

シリーズ ここまでわかつた考古学 太秦古墳群 発掘調査成果 ~大阪の初期群集墳を考える~

主催／大阪府立近つ飛鳥博物館・財団法人大阪府文化財センター

編集／財団法人大阪府文化財センター 〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

発行／2006年3月12日

印刷／(株)中島弘文堂印刷所

本事業は、平成17年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業国庫補助金によるものです。